

# 既製品浴衣についての一考察

## ——縫製方法について——

大 平 光 子\*

### A Study of Ready-Made Yukatas

#### ——Some Unique, Efficient Sewing Techniques——

Mitsuko Ohira

**要 旨** 近年、夏のファッションとして定着した浴衣は、従来のように反物から選んで自家調整することがほとんどなくなり、洋服同様に既製品が主流の時代になっている。本学での和裁履修者においても、授業での製作以前に既製品浴衣の着装経験者数が増加している。そこで、従来の大裁女物単衣長着の木綿仕立てと既製品浴衣の合理的な仕立て方を比較し、限られた授業時間数で、より効果的な指導方法を検討したいと考えた。本研究では、メーカーの異なる3着の既製品浴衣を用いて各部の縫製面を中心に比較し本学での指導方法との違いについて比較検討を行った。その結果、メーカーや価格差に関係なく3着に共通している点は東アジア（中国・韓国）で縫製されており縫合部分はすべてミシン縫いで肩当て布と居しき当て布が省略され、縫代の始末は手縫い部分の量と価格が比例していた。実際に授業に取り入れられる可能性としては、肩当て布を力布に変えること、かけ襟を略仕立てにすることにより、宿題の量を軽減し、縫製面以外にも余裕を持った指導ができるのではないかと考える。

## 1. はじめに

浴衣の縫製は、従来自家調整や注文調整の手段が多く用いられていたが、核家族化等の社会情勢の変化から家庭内で行われていた事柄が専門化、且つ細分化される傾向が強くなっているのが現状である。呉服店などへの注文調整の方も技術者の人手不足と人件費の高騰に加えて、消費者側の仕立て上りを待ち着用するという感覚は薄れ、着たい時にすぐに手に入る便利さや、ブランド浴衣の登場など色柄も豊富になっていることから、洋服の感覚で選べるという欲求を満たしてくれる点なども、既製品に依存する要因と考えられる。また、既製品が全盛となっていることから、反物として販売されている

数は、年々減少傾向にあり、学生が教材として探すのに苦勞する程になっているのが現状のようである。その学生達の多くが、反物から自ら縫い上げた達成感や満足感が大きいとする感想が多い中で、他の教科の課題とも重なり大変な思いをしているのが実状のようである。

そこで縫製の簡略化により、課題の軽減も含めて限られた授業時間数の中で、余裕を持った指導が出来ないかと考え、従来の大裁女物単衣長着（木綿仕立て）の縫製方法と、既製品浴衣の製法方法との比較を行い、その合理性を授業にどこまで取り入れることが適切か検討し、考察を試みた。

## 2. 研究方法

### (1) 研究方法の概要

前述のように既製品浴衣が全盛ということか

\* 本学助教授 服装造形学

ら、価格面でもブランド品の高価なものから手軽な価格のものまでと幅が広い中で、基準をどこにおいて資料とするか困難であるが、本研究では、資料数を3着と決め、高価格のデザイナーズブランド品を1着、中程度のデパート・オリジナル品を1着、そして最も安値で入手可能な条件の1着と決定し購入した。その3着の縫製方法について、本学の指導方法との比較考察をする。

(2) 資料について

資料として購入した浴衣3着を(図1)に示した。Aはデザイナーズブランド品、Bはデパートのオリジナルブランドとして展開されたもの、Cはノンブランド品である。

- 表示寸法については、身丈で7cmの差がみられた。しかし、袖丈・ゆき丈については大きな差がみられない。

- 価格面での比較は、Aは綿紅梅の地でデザイナーズブランド品で最も高価で29,000円。Bは綿紬地でデパートのオリジナルブランド品として展開された浴衣で、Aの約半額の15,000円である。Cは最も安値な既製品浴衣を採すという目的で購入したもので3,800円である。

- 縫製国についてみると、3着とも外国(東

アジア)での縫製となっている。Aは日本製の生地を中国での縫製、Bは日本製の生地を韓国で縫製されており、Cは生地・縫製ともに中国製となっている。

- 仕立て上がり寸法については表1に示したとおりである。

3. 縫製方法の比較

縫製については、外国(中国・韓国)に大きく依存していることがうかがえるが、本学で指導している従来の方法とどのような差がみられるか、図に表し比較をした。(資料A・B・Cと比較するために従来の方法をNとして示した。)

(1) 袖の縫い方と丸みの始末

図2に示すとおり袖下の縫い方はA・B・C共に袋縫いにしてあり袖口止まりから、ふりの縫い止まりまでミシン縫いとなっている。Nでは手縫いで袖口止まりにすくい返し止めを行い、丸み部分ではその縫い終わりで一針返し縫いを行い、ふりの縫い終わりで3cm返し縫いを行っている。丸みの始末の仕方は、Nでは、縫い糸1本どりで2本のぐし縫いをした後に縫いちぢめ、ひだ山を整えその山を半返しに

既製品ゆかた 3種			
写真	A	B	C
表示寸法	身丈164 袖丈49.3 ゆき68	身丈163 袖丈49 ゆき67	身丈163 袖丈49 ゆき68
価格	29,000円	15,000円	3,800円
縫製国名	中国(日本生地)	韓国(日本生地)	中国(中国生地)

図1

表1

名称	仕立上り寸法 (cm)			
	N	A	B	C
そでたけ	50	49.2	48	48.5~48
そで口	21~23	23	23	20.5
そで丸み	2~15	8	2	3
そで付け	21~23	23	22.5	21.5
そで幅	32~34	34	34.8~35.2	34
見つけ	155~160	167	165.4	160
えり肩あき	8.5	9	9.5	9
身八ツ口	13	14	15.5	15 (14.5)
ゆき	62.5~64.5	67	65.5	68
肩幅	30.5	33	32.4	34
後幅	28.5	上31 下30	上32 下29	30.5
前幅	23	24.5	24	26
おくみ幅	15	15 (15.2)	15	15
おくみ下り	23	23	25	23.5 (21)
えり下	76~80	81	80	79 (75)
合づま幅	13.5	13.5	14 (14.5)	15
えり幅	上5.5 下7.5	上5.5 下7.5	上6 下7	上5.3 下7.5
くりこし	15~2	1.8	2	2

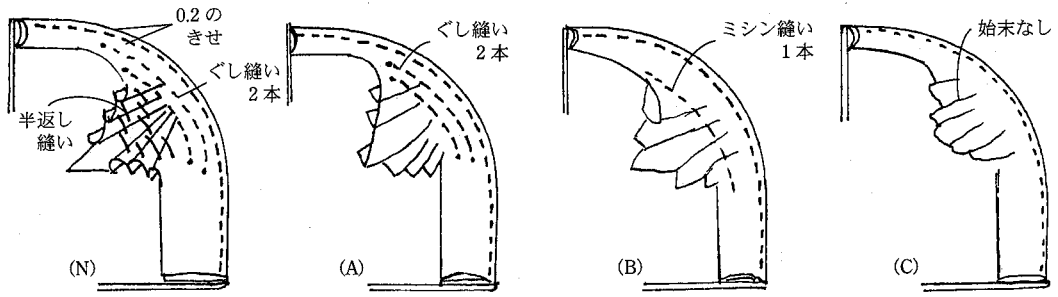


図2 袖の丸み始末

し落ちつかせる方法であるが、Aでは2本どりの縫い糸でぐし縫いを2本し、縫いちぢめたままとになっていた。B・Cにおいては始末がされていない状態で縫代を押しつぶしただけとなっていた。特にCにおいては丸み部分にきせがかけられていない。以上のことから、Nに最も近いのは、丸みの大きさが8cmのAの方法であるが、B・Cは丸みを小さくすることで、その始末をする手間を省略していると考えられる。また袖口の始末においてはA・B共にNのように三つ折りぐけで始末されているがCは三つ折りミシンがかけられているため、袖口の表に針目が出た状態である。

(2) 背縫いおよびくり越しあげ

図3に示すとおり木綿仕立ての背縫いは、Nのように耳のまま二度縫いをするのが従来のやり方であるが、A・B・C共に袋縫いとなっており、縫代の幅にもわずかであるが差がみられる。

くり越しあげはNのように2cm縫いくりこしにする本学の方法に対して、A・Bも縫いくりこしの形としては同じであるが、その縫代の始末は省略されている。Cは、くりこしはついているが、襟肩あきを肩山より2.5cmずらして入れる切りくりこしとなっている。

(3) 肩当て布と居しきあて布

図4に示すとおりNでは、並幅の和晒を120cm用いているが、A・B・C共に従来は、浴衣以外の単衣長着に用いられる力布をつけるという方法になっている。しかし力布の大きさや形にはそれぞれ特徴がみられる。Aは、バイ

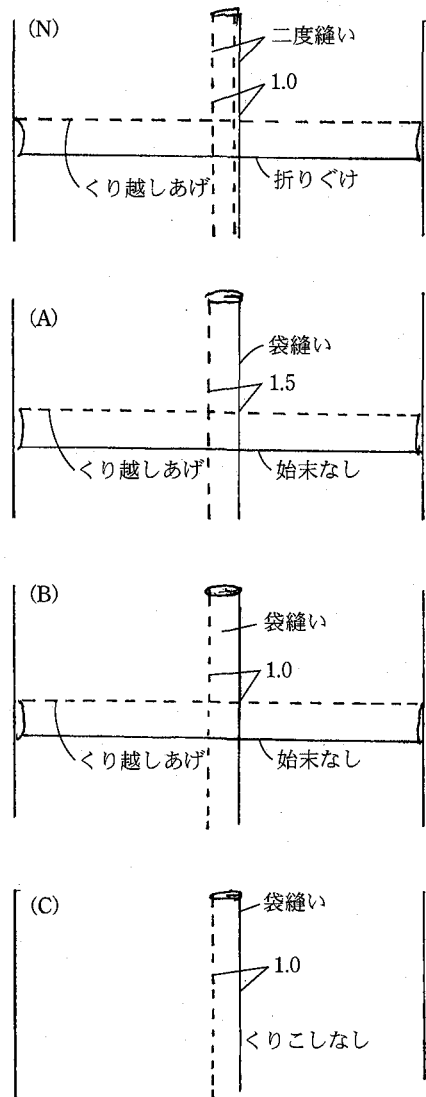


図3 背縫いとくりこしあげ

ヤス状の共布を三日月型に整えてあり、3着の中では最も丁寧な方法といえる。Bは、襟肩まわり全体に共布をバイヤステープ状につけてあることから、使用する布の量が最も多いといえる。Cは、やはり共布であるがバイヤス状に整えることなく、折りたたんだままにして縫い込んであるため粗雑な仕上がりになっている。

居しき当て布については、Nの方法は共布が残布として50cm内外ある場合はそれを用い、要尺の不足や布地が透ける等の場合は、和晒を50cm程使用しているが、A・B・C共に居しき当て付けは省略されている。これらのことから、肩当て・居しき当てに関しては大裁女物衣長着の浴衣を仕立てる方法として、従来行われている木綿仕立てと大きな違いが見られる。

#### (4) わき縫いとその始末

図5に示す通りNでは、わき縫い止まり(身八つ口)に力布で前後からはさみ、すくい留めをし3cm返し縫いをするか、ミシンの場合は結び留めをしている。A・B・C共に返し縫いはしてあるが、特に縫い止まりの補強はされていない。

縫代の始末は、Nの場合縫い代に0.2のきせをかけ、前身ごろ側に倒し2~3cmの間かくで耳ぐけをする。また、身八つ口部分で前後の縫代を開く際には、くり越しあげの位置を利用して、縫い代を三角形にたたみ、かくしじついで落ちつかせている。Aでは、一般的には木綿仕立てには用いない方法で、耳を中に1.2cm折り込み約1.8cm間かくの折りぐけにしてある。Bは、耳ぐけで始末してあるが、従来の耳ぐけのように布端をそのままではなく、折りぐけのように折り込み、耳ぐけとしている点は注目すべき手法である。Cは、手縫い部分が見られず、縫い代を1.2cm幅にしロックミシンをかけた後、くけ等の始末がされず縫い代が浮いた状態になっている。

#### (5) おくみ付けとその始末

図6に示すとおりNでは、おくみ付けの後に前身ごろ側にきせをかけ2~3cm間かくの耳ぐけで始末をしている。Aの場合は間かく

は4.8~5.0cmと広い耳ぐけで始末されている。Bは、わき縫いの始末に見られたように、耳を折り込んでから耳ぐけで始末してある。Cは、小裁単衣長着のように、前身ごろの縫代が狭い場合や裁ち目になっている時に用いる袋縫いにしてある。

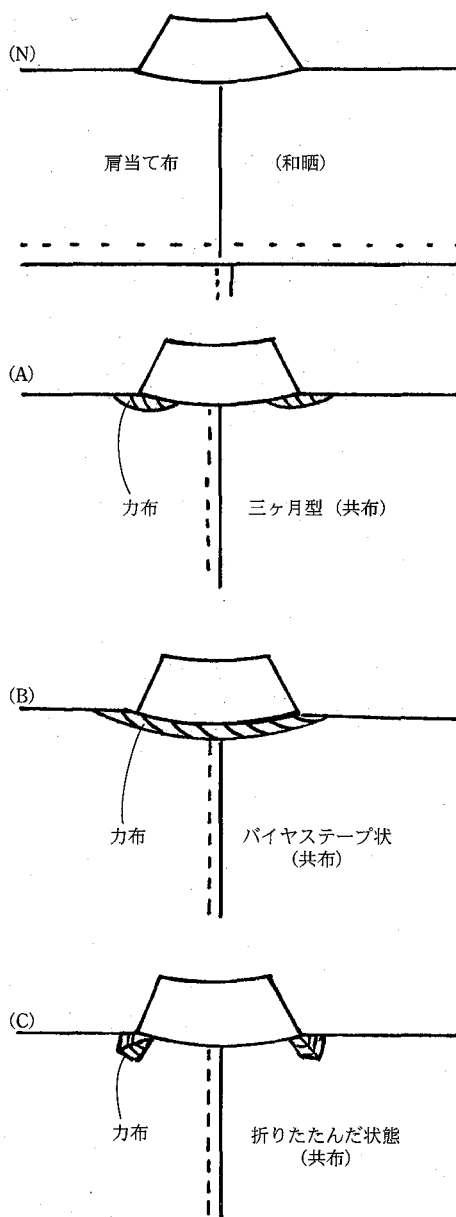


図4 肩当て布と力布

(6) 襟下・すその始末

Nでは、襟下とすそは三つ折りぐけをしている。A・B共に同様の手法であり、差がみられないが、Cの場合は三つ折りミシンで始末されているため、表側にミシン目が出ている。

(7) 襟付け・かけ襟かけ

Nでは、手縫いにより襟付け後、襟肩あき部分に三つ襟芯を入れ、襟幅を整え内側に本ぐけをする方法で付けた後に、かけ襟の先を縫いつけ表側を地襟に本ぐけにし、内側も幅を整え

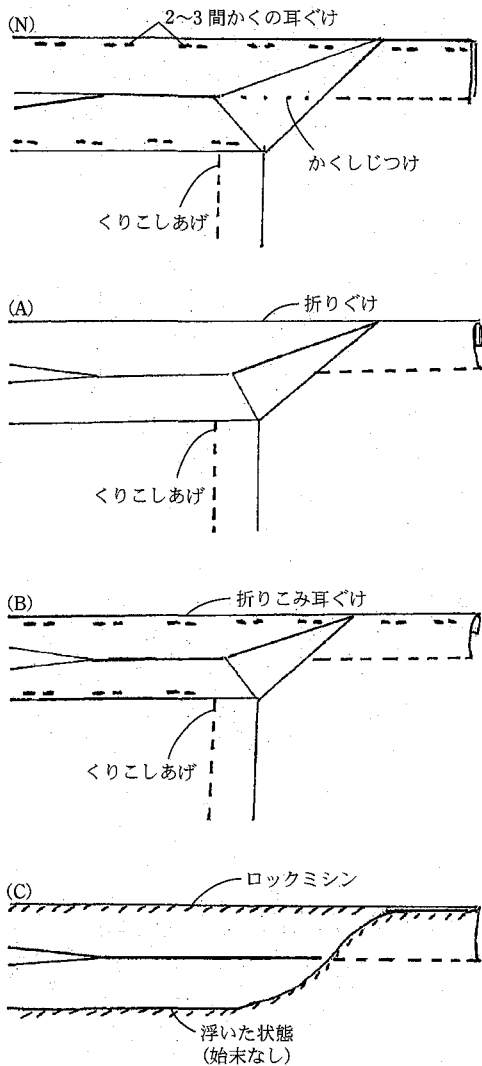


図5 わき縫い代の始末

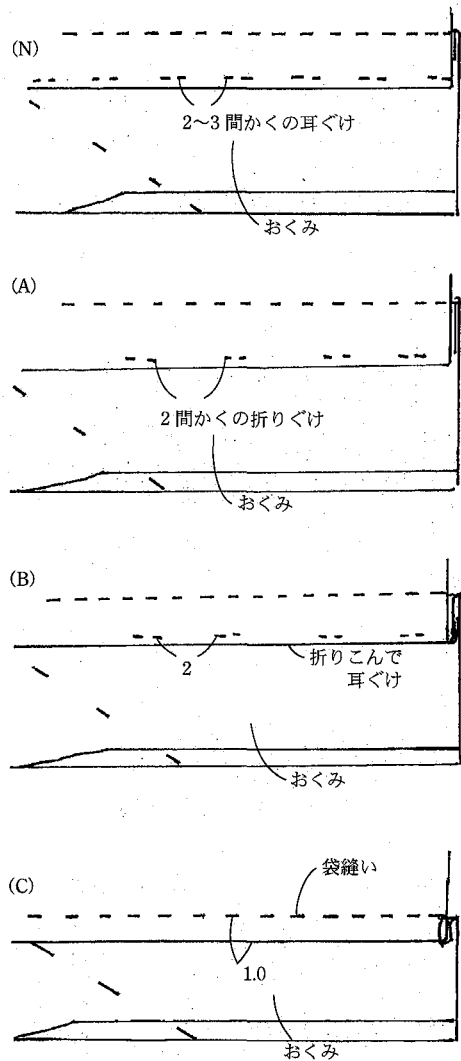


図6 おくみ付けと始末

本ぐけにしている。A・B・Cにおいては、襟付け前に地襟とかけ襟を一枚の布状にし、同時に縫い付けた後に幅を整え内側にくけるといふ略仕立ての方法になっている。特に、Cは内側に本ぐけで始末する部分を落としミシンの方法にしてある。また、三つ襟芯に用いられている布は3着共に残布であった。

(8) 袖付けとその始末

図7に示すとおりNでは、袖付け止まりに力布をつけ、手縫いによる折り付けをしている

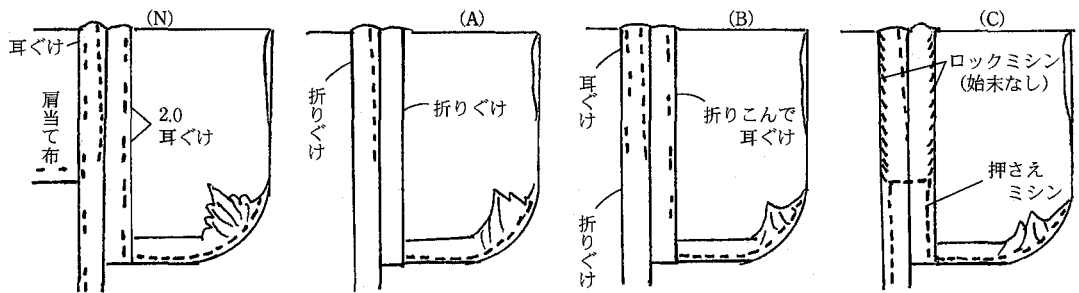


図7 袖付けと始末

が、A・B・Cにおいては力布が省略されており、ミシンでの折り付けとなっている。また、縫代の始末を比較するとAは袖付け縫代から、ふりの部分まで折りぐけであり、Bは袖付け縫代を折り込んで耳ぐけとしてある。Cは襟付け縫代にロックミシンをかけただけで、くけの処理はされていないため縫代が浮いた状態で、ふりの部分は身八つ口まで通して押さえミシンで縫ってある。

#### 4. 結果および考察

授業での縫製方法Nと、既製品浴衣A・B・Cと比較した結果、既製品浴衣の場合、縫合部分はすべてミシン縫いになっており、縫代の始末は価格に比例して手縫い部分の量が多いことがいえる。また、従来の大裁女物単衣長着の木綿仕立てには不可欠と考えられている肩当て布と居しき当て布の省略が大きな特徴といえる。そこで、これら既製品浴衣の合理的な縫製方法が、どこまで授業に取り入れることが可能か、各部について検討してみた。

##### (1) 袖の縫い方と丸みの始末

Nでは、袖口下から袖下の袋縫いまで手縫いでしているが、A・B・C共にミシン縫いであったことから、他の背縫い等をミシン縫いにする場合は、丸み部分の縫い方に注意をすれば可能であり効果的と考えられる。しかしミシン縫いで袖口止まりに、すくい留めは出来ないことから、結び留めの手法を追加する必要があると

考える。

丸みの始末は、Aがぐし縫いされているだけで、B・Cは丸みが小さいこともあるが、ぐし縫いや半返しもされておらず、着装後の管理面（洗たく等）を考えると、従来通りの始末が適切といえる。

##### (2) 背縫いおよびくり越しあげ

Nでは、背縫いを手縫いかミシン縫いかを選択する形にしているが、手縫いは仕立て直しを前提にした場合には、ほどき易いという利点があるが、浴衣の場合は、現代の生活の中で着装回数もそれ程多くなく、それも考えにくいことから和服は手縫いでという概念から離れてもう少し強くミシン縫いを奨励しても良い時期に来ていると考えられる。また、1cmの縫い代で二度縫いにする方法は、従来の反物幅（並幅）が36cm前後であった時には適切な縫い方であったが、現在出回っている反物幅は38cm以上のものが主流になってきていることから、1.5cm～2cmの縫代で袋縫いも可能と考えられる。特に、浴衣用生地が広幅のものを並幅に裁断された状態で出回っている例もあることから、反物は両端が耳という概念を進めていくと、二度縫いだけの説明では裁ち目が出たままの背縫いになる可能性があるため注意が必要な点である。

くり越しの方法は、N・A・Bのように縫いくり越しとCの切りくり越しがあるが、縫いくり越しの場合は仕立て直しを考えた場合には、前後差が生じないことから、切りくり越しとし

て変えることができ、しるし付けの時点で時間の短縮も可能と考えられる。しかし、合理的に縫製されている既製品A・Bが切りくり越しの方法を用いていないのか理由を探してみると、(図5)のように、わき縫代の始末が縫いくり越しの内あげがを利用した方法ができないために、逆に手間がかかることが理由と考えられる。Cの場合は、わきの始末が省略されていることから、切りくり越しが可能であったと推察できる。以上のことから背縫いは、二度縫いか袋縫いか反物に合った方法を選択する。くり越しあげは、わき縫い代の始末を効率的にするためにも縫いくり越しが適切と考えられる。

### (3) 肩当てと居しき当て

肩当て布を付ける目的は、えり肩あきの補強と汗取り効果にあるが、浴衣用としてワンピース型の下着も出回っていることから、Aタイプの力布を付ける方法で対応できると考えられる。

居しき当て布は、背縫いの縫目ときせの保護や透けるのを防ぐ目的で付けられているが、背縫いをミシン縫いにする場合は省略できると考えられる。しかし、学生が準備した反物の中には透ける素材も見られることから、個々に対応する必要性もある。

### (4) わき縫いとその始末

Nでも背縫いをミシン縫いにした場合は、わき縫いもミシンを奨励しているが、A・B・Cの場合、縫い止まり(身八つ口)に力布がなく留めもされていない点は、着装時にはつれの原因となるため力布を前後に付け結び止めにする方法が適切と考えられる。

縫い代の始末は、縫いくり越しによって生じる重なり分を利用して、三角形に縫代を整えNの方法でかくしじつけ後に耳ぐけが適切と思えるが、先に述べたように近年の並幅が従来の幅より広く38cm以上が主流であることから、後幅が標準の29cmかそれ以下となると8cm前後の縫代になる。そこで、A・Bのように折りぐけの方法でも良いと考えられる。特に背縫いを袋縫いとする場合は、統一感を出すた

めにも折りぐけが適切と考える。

### (5) おくみ付けとその始末

A・Bのように縫い代を折り込む方法は、布端が裁ち目の場合には適切と考えられる。Cのように袋縫いの方法は、縫代が浮いた状態になることから、子裁ちのように腰あげで押さえられて落ちつくこともないため不向きと考えられる。

### (6) 襟下とすそぐけ

A・B共にNと同様の手縫いによる三つ折りぐけであるのに対して、Cは三つ折りミシンで押さえられていることから、縫目が直線状に表側から見えている。この方法は特にすその始末において、緯地の布目方向となるため伸び易く、ミシン縫いにする場合は手縫いのようにピン打ちだけでは始末がやりにくく、しつけをかける必要性がでてくる。以上のことから従来の方法が適切と考える。

### (7) 襟付け・かけ襟かけ

浴衣の仕立ての中で襟付けは、説明に最も時間を要する所で技術的にも難しい部分であり、初心者にとり途中点検を要する個所でもある。また、かけ襟かけも本ぐけで始末をすることで、かなりの手間がかかっている。A・B・Cのように襟付け前に本襟とかけ襟を一枚の布状にする略仕立てにすると、時間の短縮はできるが、問題点として従来の本仕立てを経験していない学生に対して、説明の段階でどのようにするかということが考えられる。

### (8) 袖付け

袖付けは、A・B・C共にミシン縫いであるが、Nと同様の折り付けの方法になっている。この場合、Nのように手縫いですると5枚(肩当て布を外すと3枚)の布を縫うことは、慣れない学生にとっては一針ずつ縫い進めていくことに苦勞しているのが現状である。そこで、ミシン縫いの方が得意と感じている学生に対しては、袖付け止まりに結び留めか貫抜き留めを併用することで対処できると考えられる。

## 5. 和裁師による縫製方法について

資料として購入した既製品浴衣からも、外国での縫製が主流となっていることがわかったが、和裁師と呼ばれる人達にはどの様に受け止められているのだろうか、また、それに伴う縫製の簡略化についてどこまで同意できる範囲と考えているかを知る必要性を感じた。そこで、和裁師としての経験が8年から40年という8名に対し聞き取り調査を行った。

### (1) 調査内容

①既製品浴衣の縫製方法を目にしたことがあるか、また、外国で縫製されていることを知っているか。

②肩当て布を省略し、力布にする方法をどう思うか、また、実際に依頼された時の仕立てではどのようにしているか。

③居しき当て布の省略をどう思うか、実際に依頼された時は、どのようにしているか。

④かけ襟かけを略仕立ての方法にすることについてどう思うか。

以上、4項目について調査した結果、以下のような回答を得た。

### (2) 結果および考察

①については、全員が目にしたことがあるとし、外国で縫製されたものが主流になってきていることを知っていた。②の肩当て布の省略については、7名が力布が付けられていることを知っており、実際の依頼品に対しては、Nのように和晒を用いている人は3名で、Aの三日月型の力布にしている人が4名、また残り布の分量によって共布を緯地に用い肩当て布にするか、Aの三日月型にするかを決めるとの答えが1名であった。③の居しき当てについては、残り布がある場合と生地が薄く透ける場合は付けるが、着回数も少ないことから、必要性も薄らいできているとする人が5名、現在も依頼品には付けている人が3名であった。④のかけ襟の略仕立てについては、8名が依頼品には用いていないが、5名が浴衣の縫製には適し

ている方法と答えた。

調査対象が8名と少ないこと、経験年数にもバラつきがあり、正確なデータを取るまでには至っていないため、授業に取り入れる際の参考意見として取り入れることとした。いずれにしても和裁師と呼ばれる人達への浴衣の依頼は極わずかとなっていることは確かなことであった。そして、縫製の簡略化については肩当て・居しき当ての省略、かけえりの略仕立てを認めようとする傾向にあるといえる。

## 6. ま と め

浴衣の製作は、日本の民族衣装である和服の基本的な知識を身につけるための教材として、縫製から着装まで一貫して行うことにより大きな役割を果たしていると考えられる。しかし、浴衣ブームと言われている中で市場に出回っている浴衣の殆どが、既製品浴衣が占めるようになり、反物を探すのに苦勞する時代となっている。また、その既製品浴衣の縫製は東アジア諸国に大きく依存していることがわかった。限られた時間数の中で、現行の指導方法をどのように見直したら良いか、課題の量が多いと感じている学生の負担を軽減できないかと考え、既製品浴衣の縫製方法から合理的な実際の指導方法として導入可能な点を以下のようにまとめた。

①直線縫い部分（背縫い・わき縫い・おくみ付け）は、手縫いかミシン縫いかの選択を現状でも自由に行っているが、ミシン縫いを奨励しても良い時期にきている。

②肩当て布は、和晒を用いて肩全体に付ける方法を省略し。力布で代用することが可能と考えられる。

③かけ襟かけを略仕立てにする。

以上改良の3項目をあげた。和裁の経験がない学生に最初から省略した形の指導で良いのかという問題もあるが、洋裁においても洋服の芯地を八刺しですえていた手法が、現在では接着芯が主流となっているように、和裁の縫製方法も時代の流れに追随するべき点もあるのではな



いかと考える。また、今後の課題として従来の方法と、簡略化した方法との説明に要する時間の比較と、作業時間数の差について明らかにする調査を行い、実際の授業に実施すべきと考える。

#### 参 考 文 献

- 1) 永野順子：平面構成学実習 1，衣生活研究会（1953）
- 2) 土井幸代：和裁，同文書院（1975）
- 3) 大塚末子：和裁 1，学校法人大塚学院出版部（1999）